看護大学生への初年次教育プログラムの検討
導入基礎演習からの一考察

Assessment of an Introductory Practice in Problem Based Learning for Freshmen in Nursing Collage

橋本佳美　弓削美鈴　田中高政　征矢野あや子　水野照美　宮崎紀枝
小山智史　鈴木真理子　中嶋尚子　羽毛田博美　箕輪千佳　八尋道子
柿澤美奈子　清水千恵　高木桃子

Yoshimi Hashimoto, Misuzu Yuge, Takamasa Tanaka, Ayako Soyano
Terumi Mizuno, Toshie Miyazaki, Tomonori Koyama, Mariko Suzuki,
Naoko Nakajima, Hiromi Haketa, Chika Minowa, Michiko Yahiro,
Minako Kakizawa, Chie Shimizu, Momoko Takagi

キーワード：大学新入生，問題基盤型学習，グループワーク，キャンプ，教育プログラム評価，看護教育
Key words：freshmen in collage, problem based learning, group work, camp, education program assessment, nursing education, the first year education（First-Year Experience at Univercities and Colleges）

要旨

Ａ看護大学新入生に対して高校教育から大学教育への円滑な導入を図る目的で設定されている科目「導入基礎演習」について、その目的を達成するためにより効果的な実施方法を検討した。学生のグループワーク自己評価の評価点の推移と最終レポートから科目目標の到達状況をみると、入学当初は新しい生活や仲間となじむために学生は緊張が強く、「仲良くなる」ためにキャンプが有効であること、仲良くならないとグループワークが円滑に進みにくいことがわかった。看護は学習の過程で他者との関わりが要求される。そのため、授業目標である大学生としての学習技術の修得と友人や教員との人間関係を築くことの２つの目標のうち、先に仲間との人間関係作りを行い、その後に学習技術の修得を目指すことが効果的である。

佐久大学看護学部　Saku University School of Nursing

Ⅰ．はじめに

大学生の学習能力の低下、大学入学後の環境への不適応については、様々な報告がなされている。そのため、大学新入生に対して、「高等学校と大学等の接続の円滑化」が求められている（中央教育審議会大学分化会　制度・教育部会2007）。また、2008年には初年次教育学会が設立され、初年次教育の重要性が論議されている（山田2009）。A看護大学でも、高校教育から大学教育への円滑な導入を図ることを目的に開学時から「導入基礎演習」が１年次前期に２単位設けられている。学習の過程で他者との関わりが要求される看護学生に対して、初年次教育の方法の検討は重要である。今年度で２回目を終えた「導入基礎演習」について、受講生84名のグループワーク自己評価表(資料１)ならびに最終レポートの内容分析の結果から、学生のニーズにあった効果的な初年次教育方法の示唆を得たので報告する。

Ⅱ．導入基礎演習の概要

１．導入基礎演習の目標

1）学習活動に必要となる基本的な学習技術の修得と専門教育の動機づけとする。

2）友人や教員との交流、協働作業を行い、自分自身を表現しコミュニケーションのとり方を学び、自分の行動について洞察を深め、人間関係を築く。

２．導入基礎演習の方法

1）目標に対する具体的な方法について

目標１の方法：看護大学での学習技術と専門教育への動機づけとして、健康に関するグループワークおよび発表を企画した。

まず、グループワークの行動目標（導入基礎演習スケジュール表参照）と「効果的なグループワークをするために」という資料を提示してグループワークの方法を説明した。「健康の概念・健康について」「文献検索・調査方法について」の講義を行い、テキスト（宮内2004）を提示した。A大学の、「学生便覧」

導入基礎演習スケジュール表

日時	時間	内容（学生の行動目標含む）
4/ 8	2	オリエンテーション（授業目標、日程）　グループワークの進め方、問題を見出す方法の説明
4/15	2	学内演習（グループワーク、キャンプ準備） 必要な役割を検討し、担当者を決める　キャンプスケジュールの作成
4/22	4	学内演習（グループワーク、キャンプ準備） 講義：「健康の概念・健康について」「文献検索・調査方法について」「グループワークのまとめの書き方について」
5/13	4	学内演習（グループワーク、キャンプ準備）　キャンプ中のグループ行動計画書の提出
5/20	10	午前：キャンプ準備（必要物品の買出し）および午後の報告会の資料準備 午後：キャンプ　グループワーク報告会
5/21	10	キャンプ（レクリエーション）
5/27	4	キャンプ反省　　課題に沿ったグループワーク：テーマ選択の理由、何を調べるのか話し合う
6/10	4	グループワーク　課題に沿ったグループワーク：調査
6/17	4	グループワーク　課題に沿ったグループワーク：調べた結果を整理する
6/24	4	グループワーク　課題に沿ったグループワーク：発表の準備をする
7/1, 8	8	発表　発表された内容についてディスカッションする　発表の内容、方法をお互いに評価する
7/15	4	まとめ　最終課題レポート：「導入基礎演習で学んだこと」の提出準備を行なう
合計	60	

導入基礎演習　キャンプスケジュール表

日時	午　前	午　後
5/20	キャンプ準備（必要物品の買出し） グループ発表資料準備等	開村式　「こんなこと考えてます報告会」 夕食（準備、後片付け） 報告会後の課題についてグループワーク　　レク（花火）
5/21	朝食（準備・後片付け）　帰りの準備（清掃、後片付け）	昼食（準備・後片付け）　　レク（スポーツ大会）

「シラバス」「健康ファイル」を参考に、ふだんの生活の中で健康のための生活習慣に関わるテーマを取り上げ、各グループで問題を見出し、調査検討、考察、報告を行なった。

毎回のグループワークについては､「グループワークのまとめの書き方」の講義を行ない、教員は授業終了後学生から提出された報告書によってグループワークの進捗状況を確認した。グループワークが本格化する４回目の授業から、学生のグループワークに対する姿勢の変化を把握するためにグループワーク自己評価表（資料１）を毎回記入させた。グループワーク発表会は学生が運営し、発表評価表（資料２）を用いて各グループの発表に対する評価を互いに行なった。

目標２の方法：学習の過程で他者との関わりが要求される看護学への導入のきっかけとして、１泊２日のキャンプの日程作り、食事作りなどのキャンプ生活の運営を課した。これらを通して、他者との交流や人間関係の深まりを期待した。学生は、グループリーダー、総リーダーを決め、キャンプ運営のために必要な役割を全体で話し合い、グループ毎に役割分担して、その役割ごとの話し合いの時間を持った。また、キャンプ後にキャンプ生活に関する反省会を持った。

なお、この授業の評価は、出席、グループワーク報告、最終レポート課題「導入基礎演習で学んだこと」を総合して行った。

2）授業開始前の準備

導入基礎演習の担当教員16名で、学生のグループワークのテーマ、グループワーク報告書A4 １枚（その日のグループの目標、話し合いの内容、残された課題、次回までにしてくること）、グループワークの方法、各回の学生の行動目標、グループ担当教員の関わり方、グループメンバー、グループワーク自己評価表(資料１)､発表評価表(資料２)を検討した。学生84名を１グループ６名、14グループとし、グループメンバーは教員が学生の年齢、性別等を考慮して決定した。グループワークのための小教室、コンピューター室の予約、キャンプ場の予約、施設の物品等の確認、キャンプ場までの移動方法、使用物品の準備について学事課と話し合った。

3）授業開始時のオリエンテーション

授業の目標、グループメンバーと各グループの担当教員、各授業日の学生の行動目標（導入基礎演習スケジュール表参照）、キャンプ場とキャンプの日時、キャンプ場施設内の設備とルールとを提示した。次にグループワークを効果的にする方法について説明した。

4）授業開始後の教員の動き

教員は自己評価表と報告書からグループワークの進捗状況と学生の取り組みの姿勢の変化を観察し、学生の様子や指導上困難を感じていること、問題と思う対処について話し合い、教員相互の動きを確認した。学生が自分たちで行動できるように、教員の関わりはできるだけ少なくなるようにした。学生の提出したグループワーク自己評価表、導入基礎演習の目標に対する自己評価、最終レポートの内容の分析結果を用い、導入基礎演習の報告として紀要に投稿することを学生に説明し、学習成果と報告は学生に返すことを約束して了解を得た。

Ⅲ．実施結果

１．グループ学習における自己評価の推移

1）検討方法

グループワーク自己評価表はDeborah.Lの評価表を参考に、主に目標２の学生のコミュニケーションと共同作業の状況の変化を見ることを目的に作成した。評価項目は、①自分の意見や気持ちを素直に伝えられた(意思)②学習した内容をわかりやすく筋道を明確にして説明できた(説明)③他の人が意見を言いやすいように配慮できた(配慮)④他のメンバ

ーの考えや学習した内容を理解しようと努めた(理解)⑤意見の食い違いが生じた時、充分話し合えるように協力できた(協力)⑥時間の効果的な使い方ができた(時間)⑦私はお互いに励ましあう雰囲気作りに努めた(励まし)⑧私はグループの学習テーマを深めるように努めた(深める)⑨生じた問題・課題に私は協力して対処できた(対処)⑩私は共同作業の準備に積極的に取り組めた(共同)⑪私は共同作業が計画とおりに遂行できるよう協力できた(遂行)⑫私は共同作業を楽しむことができた(楽しむ)、の12項目で、「いつもできた」「時々できた」「まったくできない」の３段階尺度とし、２点、１点、０点と点数化した。

反復測定による一元配置分散分析と多重比較（Bonferroni法）を行い、項目別に各回の平均を比較した。有意確率を0.05未満とした。統計ソフトはSPSS16.0 for Windowsを用いた。

評価表提出者のうち全授業出席者は73名(86.9％）であった。

結果は以下の通りである。

グループワーク自己評価の平均得点の推移は、項目別の平均得点を図1.1および図1.2に示す。多くの項目でキャンプ時の平均得点が低下し、その翌週に平均得点が大きく高まるという傾向がみられた。反復測定による一元配置分散分析で有意な変化が認められた項目は、意思、説明、配慮、励まし、共同、遂行、楽しむの７項目であった。多重比較の結果、説明は５月13日時点の平均（標準偏差）が1.10(0.67)と他の項目に比べても低かったが、キャンプ後は回を重ねるごとに平均得点が高まった。その他の項目は７月15日が他の時点、とりわけ５月13日や21日と比べて有意に平均得点が高まっていた。

これらの結果は、最終演習時、グループ内での自己評価の変化を素点とグラフにして学生に返した。

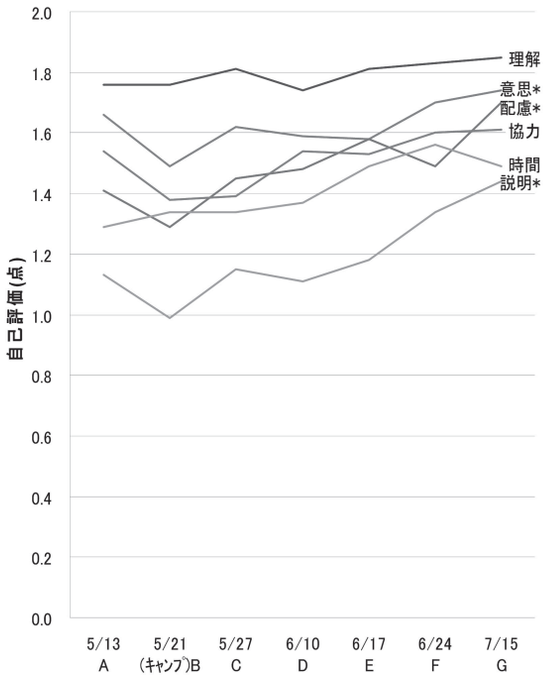

図1.1 自己評価 平均得点の推移

*:p<0.05 (repeated ANOVA)
平均値の差が有意なペア (p<0.05 Bonferroni)
意思 G*B
説明 G*F,G*E,G*D,G*C,G*B,G*A,F*D,F*C
配慮 G*C,G*B,G*A,E*B

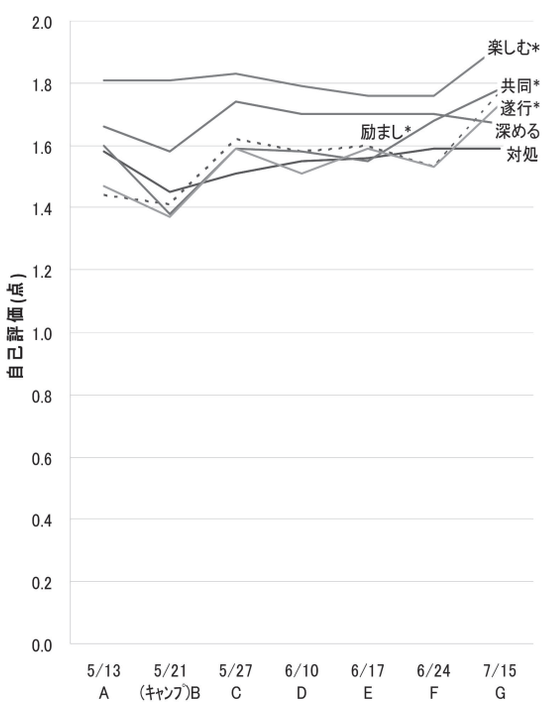

図1.2 自己評価 平均得点の推移

*:p<0.05 (repeated ANOVA)
平均値の差が有意なペア (p<0.05 Bonferroni)
励まし G*B,G*A
共同 G*E,G*B,F*B
遂行 G*B,G*A
楽しむ G*E

２．導入基礎演習の目標に対する自己評価（自由記述）

課題発表後の導入基礎演習の目標に対する自己評価は、授業終了後に学生に以下の質問で記述させた。自己評価の提出者は76名であった。

目標１については、「大学の学習方法について理解できましたか」という質問に「課題を自分で調べることができる」、「友人とのやりとりを通して考えを深めることができる」という具体的行動目標を例として挙げた。片方または両方の質問に「できた」とこたえた学生は50名（65.8％）であった。課題を自分で調べることができた学生は76名中29名（34.2％）であり、友人とのやりとりを通して考えを深めることができたとした学生は35名（46.1％）であった。

目標２についても同様に学生の具体的行動目標として、「大学生活になじめるようになりましたか」という質問に「友人や教員とコミュニケーションをとることができる」「自分の意見を言える」「友人と協力して課題に取り組むことができる」という例を挙げた。76名中72名（94.7％）の学生がなじめるようになったと答えており、その内訳は、コミュニケーションをとることができた56名（77.8％）、自分の意見を言える35名（48.6％）、友人と協力して課題に取り組むことができる28名（38.9％）であった。

３．導入基礎演習最終レポートからみた学生の授業目標達成状況について

各教員が導入基礎演習最終レポートを読んで、学生が大学生活や新しい友人関係に緊張していたこと、キャンプが新しい環境に適応しようとする学生にとって有効だったことを確認した。また、教員が大学生の学習態度として意図していた学生間の活発な議論はできていなかったのではないかということが議論された。そこで、キャンプの効果や時期、学習方法を修得するためのグループワークのあり方を検討するために、①仲良くなる、②ディスカッション、③レクリエーションやキャンプの効果の３点について、83名の学生の表現内容を抽出し、分析した。

1）「仲良くなる」に関する記述

レポートの中で「仲良くなる」に該当する記述は119箇所抽出できた。

導入基礎演習開始時は、「まったく知らない人と接することにためらいがあり不安だった」「班になじむことができず、おいていかれる気さえした」「戸惑った」「友だちができるだろうか」などはじめて接する他者に対する不安や緊張について11（9.2％）の記述が見られた。そして、グループワークを開始しても「メンバーと打ち解けられない」「話し合いがぎこちなく、自分の意見を言うのが難しい」「何をすれば良いのかわからず授業が嫌だった」となじみの薄いメンバーとの時間をどう過ごせばよいのか戸惑っているという記述が11（9.2％）あった。しかし、何とか他のメンバーに話しかけようとする努力や話しやすくするためにお互いにニックネームで呼び合うなどの工夫、「グループメンバーが優しく接してくれたので意見が言えるようになった」などグループメンバーの働きかけで助けられた経験の記述や、何とかしようとする気持ちはあるが「自分の意見を言えずにいた」というような自分の態度への反省が９記述見られた。そして、時間経過とともにグループメンバーとの関係が進展し、「親睦が深まり意見が言いやすくなった」「話したことのない人とも話せるようになった」「話し合いが楽しくなった」「積極的に参加できるようになった」などの変化は39（32.8％）あり、この変化の39の記述のうち、キャンプがきっかけで関係が変化したという記述は９（23.1％）に見られた。また、コミュニケーションの大切さや仲間の大切さに気づいたという記述は、48（40.3％）であった。

2)「ディスカッション」に関する記述

「ディスカッション」に関する記述は、209箇所抽出できた。記述の内容は、①話し合いの準備33(15.8%)、②話し合いのための工夫67(32.0%)、③報告のしかた8(3.8%)、④テーマの決め方7(3.3%)、⑤話し合いから学んだこと89(42.6%)、⑥教員の働きかけについて4(1.9%)であった。

①話し合いには、「意見を出してくれる人にうなずく等の反応を返すことで話しやすくなる」「自分の意見が無視されない」、「否定されない」「話しが途中で遮られない」等、話し合いの環境を整えることが大切であり、準備の中で「グループの仲が深まると、自分の意見が言いやすくなる」というような仲良くなって話し合いができるという記述は14(51.9%)あった。

②話し合いが進まなくなった時、「記録を見返して自分たちが何を調べていたのか見直す」「わからないときは聞き返すことが大切」「『論点がずれたら原点に帰る』を合言葉に軌道修正した」等の工夫、自分と違う意見の大切さや意見の言い方については、「わかりやすい言葉で表現する」「反感をかわないように言い方を工夫する」「自分の言葉で言い直す」「他者を責めない」というような表現が見られた。しかし、反対意見についての記述は「違った考えを聞くことは自分の視点とは違う見方、考え方を知ることができるのでプラスになる」のように抽象的であり、具体的な問題の記述やその論点については記述されていなかった。また、できるだけ人間関係を壊さないようにしようとしていた。

③、④については、中間報告を含めて、自分たちの成果を皆の前で発表することで得られた学習の視点や改善点等が、「質問によってグループ内では発見できなかった問題を発見できたり新たな視点で見直すことができた」「自分たちが納得していても改善点は沢山あり、もっと話し合う必要があった」のように表現されていた。また、「質問者の意図が理解できず、発表後に学習を深めることで、今まで気がつかなかった知識を自分のものにできた。これは、質問者と真剣に言い合えた（からだ）と思う」という記述が見られた。

⑤については、「回を重ねるごとにどのように話し合えばよいかわかってきた」「動機をはっきりさせないと他の人には伝わらない」「他者に伝えるためには他の人にわかりやすい言葉や文章にしたりすることが大切」「話し合いや情報の共有が不足すると矛盾や不足箇所が出てくる」など実際にグループワークをして実感として理解できたことが述べられていた。

⑥については、教員の働きかけで話し合いが進んだり、疑問点が明確になったり、話し合いの具体的な工夫ができるようになったことが表現されていた。

3)「レク・キャンプ」に関する記述

「レク・キャンプ」についての記述は73あり、「キャンプを通して沢山の人と話した」「グループの絆が深まった」とするもの24(32.9%)、協力することで得られる成果について21(28.8%)、自主的に動くことが必要8(11.0%)、話し合いの難しさ5(6.8%)、「キャンプが終わった後、キャンプの意味がわかった」「充実感があった」「思ったより楽しかった」などやってみてわかったことは13(17.8%)の記述があった。

4．教員の動きと結果

キャンプ前に、学生の自主的な動きが少なく、教員が提案したことに対して自分たちの考えを話し合うことをせずに従う様子から、できるだけ労力をかけずに行動しようとしているのではないか、グループ毎やキャンプの係毎に話し合いはされているが、横の連携が悪い等の意見が出された。横の連携がとれるように各リーダーに働きかけた。また、教員はできるだけ学生が自分で決断し行動できるように関わった。キャンプ中も各係りの担当

者がバラバラに動いており横の連携が悪かったため、リーダーに話し合いを促した。翌日から学生間の協力体制は良くなったが、ところどころで連携の悪さは目に付いた。キャンプ後は、自分たちで話し合いのリーダーや時間の使い方を決める等、学生の自主的な行動が多く見られるようになり、グループの話し合いも和やかになっていった。

課題発表時は、真剣に聞くことができるように互いの発表の評価をした。しかし、発表の場での意見交換は活発ではなかった。発表の内容を示した手元資料では、伝えたい内容が文章で充分表現されていなかった。プレゼンテーションの方法として、パワーポイントを使用したことは、見易さという点では良かったが内容が浅かった。

発表時の各グループに対する学生のコメントは、了承を得て各グループに返した。

課題発表後に、各グループでグループワークについて振り返りの時間を持ち、その後最終のグループワーク自己評価をさせた。

目標1）の学習技術の習得という点については、以下のとおりである。グループワーク報告書を用いてその内容を学生の記述したとおりにまとめ、毎回書き方の注意をして返したが、内容が「本日の話し合いはうまくいった」「調べ方がたりなかった」というような記述が多く、話し合いの内容が見えるものにならなかった。調査結果についての記述も調べたことがそのまま記述されており、調査の結果から考えたこと、検討した内容はほとんどなかった。

Ⅲ．考察

１．授業目標と授業の方法について

1）授業目標について

目標１の学習方法の習得は、以下の点について検討した。

(1）ディスカッションについて

レポートに具体的な問題の記述や体験から得られた内容や自分たちの態度や話し合いの方法について書かれていたが、論点については記述されていないこと、自己評価の学習テーマを深める点が初回と最終回で変化がほとんどなかったことから、学習目標の入り口段階で終わっているように思われる。教員が大学生の態度として意図した「一つの問題について各々の意見を出し合って議論する」に至っていない。当初、仲良くならなくてもディスカッションはできると推測していたが、『配慮』や『励まし』のような他者を中心とした変化があるにもかかわらず『協力』、『対処』の自己評価の変化が少なかったことから、できるだけ人間関係を壊さないようにしている学生の様子が伺えた。学生の自己評価平均点の推移からみると、キャンプ時の自己評価が低下し、その翌週には評価が著しく改善する傾向がみられた。この理由として、キャンプではテーマに関するグループワークの他にキャンプの運営作業が加わり、共同作業の結果がキャンプ運営の成功や失敗として明確に現れるため、机上の共同作業だけを行った他の回よりも厳しい評価につながったと考えられる。また、キャンプ後の評価の著しい改善は、学生間のコミュニケーションがキャンプによって良くなった結果と推察される。

これらのことから、大学生として議論をすることと仲間との関係を作り維持していくことは別であるという学習はできていないと思われる。これは、学生の知識の乏しさから調べたことを議論するところまで到達し得ないことも一因であろう。しかし、最終レポートからは問題を見出し報告するまでの一連の過程を経ることが学生にとって達成感があったことがうかがわれた。

今後はグループ学習の課題については、キャンプ生活の体験に基づいた問題点を出し合い、(例えば、睡眠、食事、人間関係など）話

し合う。問題ごとに学生が集まり、グループをつくる（ただし、１グループ７人までとする）。または、こちらであらかじめ論点が割れているような話題を提供し、ディスカッションに重点を置くことにしても良いのではないか。また、事前に文献の探し方、読み方について学習できるようにする。この点については、講義を行なう。学生が一連の過程を体験し、達成感が持てるようにする必要があると考える。

(2) 仲良くなるについて

入学直後の学生は、『仲良くなる』の結果からもわかるように非常に緊張している。また、「何をして良いのかわからず授業が苦痛だった」という学生の状況を考えると、授業の到達目標をより具体的に、例えば「自分の意見が言える」、「言いたいことが伝えられる」、「話し合いに参加できる」等示す必要がある。

今回、毎回の学生の行動目標を提示したが、行動目標に従おうとするあまり、学習を深めることより、形にまとめることに意識が集中していたのではないかと思われる。入学時の個人差や学年による集団の持ち味が違うので、目標の提示方法は再検討が必要である。

2) 授業の進め方；初年次教育の方法

レポートの記述や学生の行動から、学生は仲良くならないと自分を安心して表現できない傾向にあることがわかった。これは、大学新入生に対する調査の結果、対人緊張感、友人作りが不得手であるための孤独感、恒常的なイライラ感、朝の疲労感を自覚する学生の増加を指摘する報告（一宮，2003)、大学生のメンタルヘルスに関する報告（松井，2006）からも理解できる。キャンプを学生の緊張をほぐし、教員や仲間との交流を密にして大学生活をスムーズにスタートさせるねらいで実施している大学もある（滝内，2003)。

新入生に対しては、まず学生の緊張を和らげ、話し合いができる前提条件をつくる必要がある。学生のレポートからもキャンプは学生の緊張を和らげ、仲間作りをし、話し合いの前提条件をつくる方法として有効であった。しかし、５月のキャンプで目標１と２を同時進行させるのは、学生の状況や準備状態から考えると無理がある。キャンプの時期をもう少し早めて、仲間作りをしてからグループ学習に入る方法が有効であると考える。

具体的な進め方として、学生がキャンプ生活を計画、実施できるように準備させ、結果的に学生同士が話し合いや協働作業をしなければならない状況を作る。できるだけ早く学生の緊張を和らげるためには、授業の最初にゲーム（例えばフルーツバスケットのような身体を動かすゲーム）で緊張をほぐし、できるだけ全員が触れ合う機会をつくり、ゲームで結果的にできたグループでキャンプ準備の話し合いを始めるなどの工夫が必要である。グループワークをするときのルールは、あらかじめ提示する。意見交換については、教員がアドバイスしながらすすめる。

大学での学習方法の習得のために、グループワークの報告書によって自分たちの考えを整理させ、書く力をつけようとするねらいは、十分な効果が得られなかった。報告書は毎回提出させるのではなく、提出させる日時を決め、報告書に必要なことが書かれているかどうか教員がアドバイスをするという方法で、学生が記録の書き方を理解できるようにする。

学習成果の報告（資料３）は、学生にとって自分たちの学習方法やプレゼンテーションの仕方を見直すきっかけになっている。しかし、パワーポイントを使わなければ内容が伝えられないのではなく、配布資料で内容が伝達できるようにする必要がある。

3) 教員の関わりについて

毎回授業の終わりに話し合いを持ったことで、学生にどのように関わればよいのか、その時々の学生の問題への対処はできていた。また、教員間のコミュニケーションが良く、率直な意見交換ができた。しかし、今年度は

開学から２年目であり各グループに１名の教員配置が可能であったが、全学年が揃うようになるとかなりの時間的拘束になるため、この方法は難しい。

２．今後の課題

次年度以降、講義・演習・実習が３学年分始まり、各教員が導入基礎演習に継続してかかわる機会は少なくなる。そのため、教員の関わり方については授業開始前に打ち合わせを行い、無理のない方法を検討する。

なお、今回の報告では、グループワークに於ける自己評価を試みたが、グループワークそのものの評価方法については検討していない。

文献

Deborah. L. Ulrich（2002）／高島尚美．看護教育におけるグループワーク学習のすすめ方．医学書院

一宮厚、馬場園明、福盛英明、峰松修（2003）．大学新入生の精神状態の変化：最近14年間の質問表による調査の結果から．精神医学，45(9)，959-966

松井三枝、田中邦子、加藤奏、倉知正佳(2006)．大学生のメンタルヘルス：６年間の新入生のMMPIの動向．富山大医学雑誌，17(1)，9-12

宮内泰介(2004)．自分で調べる技術：市民のための調査入門．岩波アクティブ新書117

滝内大三(2003)．キャンプ実習と大学教育：導入教育の試み．大阪経済大学論文集，53(5)，1-20

中央教育審議会大学分化会　制度・教育部会 2007

山田礼子（2009）．特集「学び方を学ぶ」－広がる初年次教育への取り組み　初年次教育とは何か」「生徒」から「学生」にするための方策．看護教育，50(5)，376-381

資料１

自己評価表　　グループ番号　　学籍番号　　氏名

自　己　評　価	いつも 2点	ときどき 1点	まったく 0点
1．自分の意見や気持ちを率直に伝えられた			
2．学習してきた内容をわかりやすく道筋を明確にして説明できた			
3．他の人が意見を言いやすいように配慮できた			
4．他のメンバーの考えや学習してきた内容を理解しようと努めた			
5．意見の食い違いが生じた時、充分話し合えるよう協力できた			
6．時間の効果的な使い方ができた			
7．私は互いに励ましあう雰囲気作りに努めた			
8．私はグループの学習テーマを深めるように努めた			
9．生じた問題・課題に私は協力して対処できた			
10．私は共同作業の準備に積極的に取り組めた			
11．私は共同作業が計画通りに遂行できるよう協力できた			
12．私は共同作業を楽しむことができた			
合計			
自由記述			

資料２

導入基礎演習発表評価表　学籍番号（　　）学生氏名（　　）

（　　）グループ　（テーマ：　　）

項　　目	全くそう思う	そう思う	どちらかといえばそう思う	思わない
1．テーマの目的（動機）が明確であった				
2．発表内容に一貫性があった				
3．テーマにそって良く調べられていた				
4．調べた結果に基づいて自分達の意見が述べられていた				
5．分かりやすく伝える工夫があった				
コメント a 発表から学んだこと　b 発表したテーマ（取り組んだテーマ）をさらに発展させるための提案 c その他自由な意見				

資料３

導入基礎演習　グループワーク発表テーマ

グループ名	テーマ
１G	ストレスについて
２G	一人暮らしをすると生まれてくる健康上の食生活の問題点
３G	食品添加物は体にどう影響するか
４G	今からできるメタボ予防
５G	睡眠について
６G	不眠症について
７G	水
８G	これから使える正しい民間療法
９G	理想的な食事
１０G	めざせ！！健康マスター
１１G	ファッションと健康
１２G	健康のための姿勢作り
１３G	良い食生活について
１４G	ダイエット